

Summer Session

~テレビの未来を考える~

今月の な人

株式会社フジテレビジョン
編成制作局
バラエティー制作センター部長

宮道 治朗さん

みやみち・じろう/1991年株式会社フジテレビジョン入社。入社以来バラエティ番組制作一筋。「なるほど!ザ・ワールド」「クイズ!年の差なんて」「ものまね王座決定戦」や各種音楽番組などでAD経験を積み、「力の限りゴーゴー!!」「ザ・ジャッジ!~得する法律ファイル~」などを演出。その後プロデューサーとしてレギュラー番組では「ネブリーグ」「トリビアの泉」「ホンマでっか!?TV」などを、特番では「青春アカペラ甲子園全国ハモネブリーグ」「さんま&くりいむの芸能界マル秘個人情報グランプリ」「芸能界特技王決定戦TEPPEN」などを立ち上げる。2011年編成部企画担当部長。現在、編成制作局バラエティ制作センター 部長。

「フジテレビはどうですか。」
すべての番組がそうとはいいませんが、うちは「作っている人の個性が一番見える局」という言われ方をされます。私は、そのとおりだと思っていますし、フジテレビはそうでありつけなければいけないと思っています。その自負と自賞は、フジテレビの社員はみなどこかに持つているはずです。

同感ですね。トライアルを受け入れる——これをしなくなつたら、我々は終わりです。企画にベットするのではなく、人にベットするということ。特に若い人間にベットするということが大事です。きっと光る若い人材に「間違いなくチャンスを与える」ことが、我々おとなたちの使命です。チャンスを与えるということは、イ「ホール失敗させる」ということですから。それをやらないと、人材はどんどん縮んでいき、結果番組がつまらないものになつていきます。その番組が人の気持ちを動かすかどうかは、制作者の「熱」に比例しますから。こうすれば数字は上がるだらうという計算によつてカタチだけ整えた番組、制作者の熱がみえてこない番組は、人の心を動かすことはできません。

—前号のよみうりテレビ西田さんも、「上が手を出しすぎるから若い者が育たない。上が手を出して外すぐらいなら若いのに思いつきり失敗させた方がよい」とおっしゃっていました。

今、世の中すべてが過渡期です。政治も、経済も、メディアも。テレビ制作の現場で言えば、制作者もタレントも、すべてが過渡期です。私たちの世代は、ともすると「昔は良かったのに今は…」といふがちですが、我々の世代が大好きだったテレビ、我々にとってキラキラと輝いていたテレビと、今のテレビとは全くちがうものかもしれないと疑つてからなければならないと思います。私たちが面白いと思うものと、今の20代の若い制作が面白いと思うものは違うわけで。ですから、勇気をもって過去の成功体験を捨てる必要があるのかもしれません。

「御社のキャッチコピーだった『楽しさ』
なければテレビじゃない』には、そうい
う『フジテレビイズム』が表れているこ
とですね。

勇気の問題だと私は思いますね。自戒を含めて。フジテレビという局は昔から「他がどうもやらなかつたことを先陣をきつてやる」という文化があるんですね。「それ、うちがやらなくてどこがやるんだ!」まずフジテレビがやらないと――という自負と義務感みたいなものがたり、自分も先輩たちの背中を見て育てられて、いつの間にかその意識を持つようになりましたが、近ごろその意識が少し影を潜めているのを、自分含め社全体に感じじることはあります。たとえば、バラエティに入れるスーパーあるじゃないですか。見ていてる視聴者側からすると、ういい加減辟易してますよね。入れていの制作者側も、実は同じ思いなんですね。

※続きは「フレス2012 Summer Session」で

そこは今の制作者たちも大いに見直し、原点に返るべき部分だと思います。

<http://www.jpg.co.jp/press>